

幻の黄夢庵

大湖 賢一

二〇〇五年秋、久しぶりに小田原を歩いてみた。江戸時代の姿への復元工事が進む小田原城の横をまっすぐ行き、国道一号线に出る。交差点を渡り、西湘バイパスの手前の道を右に曲がってしばらく行くと小さな林がある。林にはひっそりと伊藤博文の別荘滄浪閣跡の碑がある。碑の周りは鬱蒼とした雰囲気、訪れる人もあまりいないのである。しかし、この碑の手前、今は住宅街になっている一区画が、明治時代の政治家野村靖の別荘跡だとはほとんど知られていない。

野村靖は、神奈川県に縁の深い人物だ。明治九年から一四年まで神奈川県令をつとめた。明治四〇年に明治天皇の皇女である富美宮・泰宮の養育掛となり、鎌倉御用邸を何度となく訪れた。実は野村が明治四二年一月二四日に死去したのは、鎌倉御用邸内である。

明治時代になると、温暖な気候に恵まれた湘南地域は保養地に最適な場所として考えられるようになる。特に明治二〇年に新橋―国府津間に東海道線が、翌年に国府津―小田原―湯本間に馬車鉄道が開通したことで、保養地としての条件が整っていった。

野村は明治二一年、御幸の浜に別荘を建築し黄夢庵と名づけた。これは黄梁一炊の夢（邯鄲の夢）からとったものだが、野村夫妻には六男六女（そのうち三人は夭折）と多くの子どもがおり、「子を産む庵」から名づけたとも言われている。

明治二三年になると黄夢庵の隣に伊藤博文が別荘を建て滄浪閣と命名する。この前後から榎本武揚、森有礼、大鳥圭介、そして明治四〇年代には山県有朋などが次々と国府津―小田原地域に別荘を建築した。彼らの間には当然のように頻繁に行き来があり、

政治的な舞台にもなった。

例えば、民法典改正の原案を作成するため、穂積陳重、富井政賞、梅謙次郎は一時期、滄浪閣の一室に閉じこもっていた。明治二三年八月から二月まで黄夢庵に逗留した山口県出身の日本画家長八海の日記には、伊藤や井上馨、毛利元徳などの交流や野村の息子尚一の死の場面が描かれている（工藤二郎『八海東上日記抄』海鳥社参照）。

また黄夢庵は意外な出来事の舞台にもなっている。野村の娘の末子は、後に九州帝国大学教授になる中金一と結婚した。金一は野村の葬式直後に病に倒れ、昭和一七年まで不遇の日々を送るのだが、彼の弟が『銀の匙』で有名な作家中勘助である。

中勘助は明治三八年、四〇年の夏を黄夢庵で過ごしている。短編「網ひき」（昭和二二年）において中勘助は、黄夢庵について「別荘は談話室でもあり遊戯室でもある茶の間をふくむ母屋と、廊下つづきで小高いところに建てられた高間といふ一棟と、新座敷といふはうとにわかれてゐた。：高間からは海が見晴らせて、襖にはこつくりした文人画の魚がぼたりぼたりとかいてあった」と回想している（『中勘助全集』第四巻、岩波書店、及び木内英実『中勘助と小田原』『小田原史談』第一九九号参照）。

私たちは、歩く会の実施前に、下見も含めて何回も現地を調査する。しかし、それでも思いがけない時に、「埋もれていた歴史」に遭遇することがある。調査・研究にはこれで終わったということはない。そんな当たり前のことを黄夢庵跡で実感した。

（京浜歴史科学研究会事務局員 二〇〇五年二月一〇日記）